

ソコニアルイミ

～土地の固有性と都市～

高橋 諒 (指導教員 八尾 廣)

1 はじめに

静岡県三島市は古くから、東海道の宿場町や箱根峠越えの休息地として賑わっていた。また、湧き水が市内各地で見られることで有名になり発展していった。

1934年に、JR 東海の東海道本線から伊豆半島中部温泉地への便を図る目的で分岐駅として三島駅が建設されると、新幹線から富士山を望められる事や「伊豆の玄関口」と呼ばれるようになり人気をあつめ、近年では県内第2位の乗降者数を誇る。

しかし、町の発展により湧き水は少しずつ減少していきグリッド状に並んだ街路ばかりとなってしまった。単調に並ぶ街路・直線的な導線・街路に顔を向けて建つ建築は、単純明快な都市構造とは裏腹に変化がなくなっている。

2 敷地

敷地は、静岡県三島市の三島駅北口駅前広場である。

昔この場所は、御殿場川と源平川の流れをくむ川が多数存在したが現在は暗渠となっており、今では広域な駐車スペースとなっている。



図1、敷地航空写真

3 土地の固有性

土地にはそれぞれの個性や固有性が存在する。土地は一つとして同じものは存在せずそれぞれが、メリットと

デメリットを兼ね備えている。気持ちの良い空間とは、建築と敷地の個性がうまく溶け込んでいる空間ではないだろうか。今回の静岡県三島駅北口は、敷地面積の54854.88㎡のうち30385.923㎡が平面駐車場になっており、町の特徴である湧き水とグリッド状に並んだ街区に広域な駐車場と企業などが多数混在し、無計画な建物と空地が混在したデッドスペースとなっている。人々はこのグリッドの上を歩いて楽しいだろうか？都市における魅力的な空間があるだろうか？今回このデッドスペースに、川の流れ・建築の流れ・人の流れによるグリッド都市の中に新たなランドスケープを持った、伊豆の玄関口三島としての魅力的な空間を設計する。



図2、敷地の現状 (北口と南口の比較)

4 プログラム

まず、敷地のボリュームを立ち上げそこに暗渠となっている川の軌跡と駅からの主要の同線を引く。それらを川が浸食したような路地空間に構成し、それによって出来た街区をさらに小分けのボリュームとして裏路地や中庭的な空間を設計する。これによりグリッド状に並んだ街区は無くなり三島の特長でもある川沿いの原風景を継承した町並みがあらわれる。

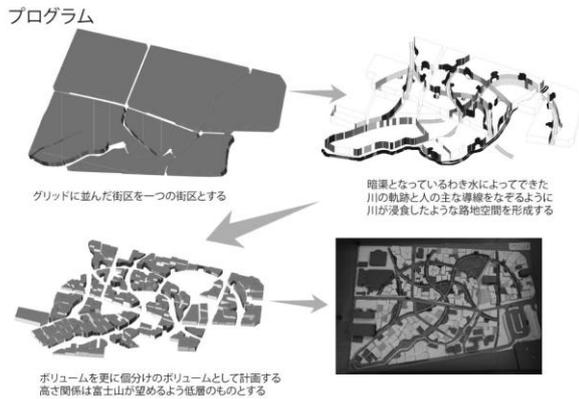


図3、プログラム図



図4、模型写真

5 川と路地の関係性

今回の大きなテーマでもある土地の固有性を、三島市では川沿いの風景にあると考える。川沿いを歩く人は、川を挟んでお互いを意識することが出来るがふれあう事は出来ない。この関係性を街の路地に反映させる、川の境界線沿いに壁を立ち上げ道を3分割する。この壁には川沿いの関係性などを反映させそれぞれ機能をもたせる。40cmの壁には腰掛ける事が出来る。1mの壁には壁を挟んで会話出来る。3.5mの壁には二階のデッキとして利用する事が出来る。4.5mの壁には周りの様々なファ

サードを隠し、街の統一感を持たせる。

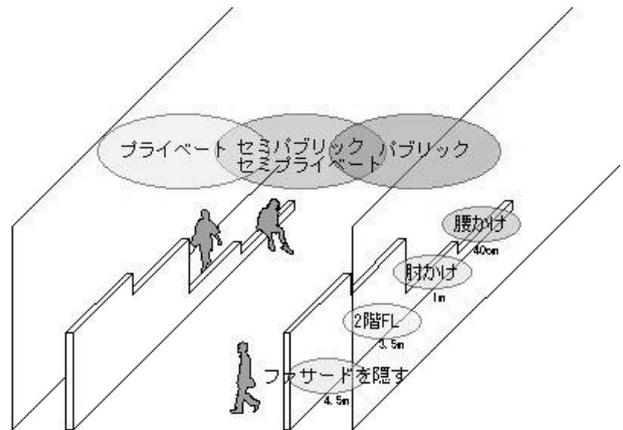


図5、二つの壁によって出来る空間

これらの壁によって空間構成することにより路地には様々な景色の変化が現れる。また、真ん中の路地や両側の路地によっても変化を楽しめることが出来る。

今回の計画では川沿いの関係性を反転させた路地空間を提案した。川沿いでは真ん中に自然があり両側に歩行空間が存在するが、路地空間では3枚の壁によって仕切られた空間の真ん中を歩行空間とし川を歩く、両側の空間に自然の要素を与え広場や建物の庭とする。これにより真ん中の路地をパブリックとし、両側の路地は建物と挟まれているためセミパブリックやセミプライベートという要素が当てはまる。このセミパブリックやセミプライベートには建物との間に大きな水たまりの様な空間を設け、そこを利用して人々のコミュニケーションを活性化させる。



図6、模型写真

6 終わりに

本計画により、この地が住民や観光客にとって湧水の街三島として魅力的な空間と生まれ変わることを期待する。